



# フランス文学研究室 NEWS

2023年8月 第11号

State College, PA( photograph by the editor)

## 本号の内容

1. イベント報告
2. 在学生数
3. 修了生進路
4. 学部生の声
5. 卒業生の声
6. フランス語教育
7. 留学報告(フランス・アメリカ)
8. 編集後記

## イベント報告

\* 令和4年6月31日

日本フランス語教育学会 2022 年度大会

(高度教養教育学生支援機構・深井陽介准教授 文学研究科・阿部宏教授 主催)

\* 令和4年9月28日

第七回支倉シンポジウム (Naraku: Discord, Dysfunction, Dystopia) 〈The "Aesthetics of Perishing" and the Japanese Reception of The Song of Roland〉

(文学研究科・黒岩卓准教授 オーガナイズ・メンバー)

\* 令和5年5月6日

フランス文学研究室・就職講演会

(講師：井手智也(エノテカ株式会社)、大江雄平(富士フィルム)、石田雄樹(神戸大学)、渡部理沙(独立行政法人統計センター)、松田ちまき(横浜市役所)、白石冬人(税理士法人アビナリーマネージメント)、千葉大輔(KADOKAWA))

\* 令和5年6月24日

日本フランス語学会第343回例会

(文学研究科・阿部宏教授 主催、対面と遠隔のハイブリッドで開催)

## 在学生数

学部生：10名

博士前期課程：1名

博士後期課程：2名

## 修了生進路

学部生：ワールド・インテック

七十七銀行、ネスコ

博士前期課程：ノースアジア大学事務職員



3年ぶりに開催された就職講演会後の宴会の様子

## 学部生の声

英語学専修に所属し、専門である英語学の勉強の傍らフランス語の勉強も続けている学部3年の渡邊瞬さんから、前学期の阿部先生のフランス語学の授業の感想を寄せてもらいました。

学部2年のときに阿部宏先生の授業「フランス語学基礎講読」を受講しました。この授業は、フランス語で書かれた日常的な文章を読み進めながら、フランス語の文法、語法に関する理解を深めていくというものです。2年生以上を対象とした授業ではありますが、1年生で学ぶことになっている基本的な文法事項に関して先生がかなり(場合によっては1年生の基礎フランス語の授業以上に)詳しく、掘り下げた説明していただきました。単語や文法などの説明の際には必要に応じて授業で扱っているテキスト以外の用例も示してくださるので、授業で取り上げられる文法

や、語法に関してより深く理解することが出来ます。また、質問に対しても丁寧に答えてくださるところも、とてもありがたかったです。授業としては、読み進めていく文章の内容はもちろん、文法解析や一つ一つの単語の語法など、フランス語一般にかかわる内容を多く学んだように感じます。ときにはテキストの読解はほとんど進まず、一つの語や文法に関する議論で90分間の授業が終わってしまうこともありましたが、阿部先生の「伝える」ことへの熱意を感じました。

フランス語学基礎講読を受講することで、フランス語という言葉「語学的」に理解することが出来、今後のフランス語の勉強に向けて弾みが付きました。本稿を書きながらこの授業を履修してよかった、と改めて感じています。  
(英語学専修3年 渡邊瞬)

## 卒業生の声

フランス文学専修を卒業され、現在は山形県の高校で国語を教えながら歌人として活躍されている高橋良さんから卒業後のフランス語・フランス文学とのかかわりについての文章を寄せていただきました。高橋さんは2022年に著書『斎藤茂吉からの系譜』(文芸社)を上梓されました。

### 二つの言葉のうち、つまらない方を選ぶこと

学部卒業後、国語教員として山形県の高校で働くことになり、斎藤茂吉(1882-1953)やその弟子たちの短歌や随筆を読むようになりました。茂吉は、山形県南村山郡金瓶村(現在の上山市)の生まれです。彼の弟子に宮城県柴田郡大河原町生まれの歌人・佐藤佐太郎(1909-1987)がいます。佐太郎の歌論には、ヴァレリー、フロベール、ロダン、ロマン・ロラン、アンドレ・ジャンソン、ジャン・マリ・ギュイヨーといったフランスの文学者や思想家、芸術家の言葉の引用があります。彼の文章はいわゆるアカデミックなものではないため、引用元は書かれていません。例えば、佐太郎のエッセー「純粹短歌論」(1953)のなかに、「ヴァレリイは『二つの言葉の中、つまらない方を選ぶこと』を教えているが、これは逆説ではない。」という文章があります。調べてみると、"Entre deux mots, il faut choisir le moindre."という文の訳で、'Tel Quel' (1941)から引用されたものだとわかりました。さらに詳しく調べていくと "Entre deux maux, il faut choisir le moindre." (二つの悪のうち、小さいほうを取る)ということわざを踏まえた語呂合わせだということがわかりました。

このようなことから、短歌を初めとする日本近代文学と付き合っていく以上、フランス語・フランス文学を学び続けなければならないということを日々痛感しています。東北大学フランス文学研究室での学びは、卒業後数年を経た今でも続いているのです



『斎藤茂吉からの系譜』表紙

(学部卒業生・惺山高等学校講師 高橋良)

## フランス語教育

学部時代映画プロジェクト、フランス語弁論大会などフランス語関係の活動に積極的に取り組んできた黒井駿さんですが、今は修士過程に在籍して英語学を研究しながらウルスラ高校で非常勤講師としてフランス語・英語の教育に携わっています。今回はウルスラ高校での授業の様子について文章を寄せていただきました。

私は今、ウルスラ高校で非常勤講師として英語とフランス語を教えています。私が担当するフランス語の授業は通常、カルタ取りから始まります。フランス語の名詞が表すものをイラストにしたカルタを生徒に取り合ってもらいます。一人の生徒が単語を読み上げ、競技者の生徒がイラスト札を取り合うという仕組みです。

イラスト札にはある工夫を施しています。それは名詞の性を反映した色分けです。公共の場でよく見かける表示のように、男性名詞は青、女性名詞は赤で縁取りしています。これにより生徒は各名詞の性を視覚的に記憶することができます。今では、生徒にある名詞の性を思い出してもらおう際、色を問えば足りるようになりました。

カルタは読み方にも工夫があります。名詞のスペルが書かれた読み札には、必ず冠詞をつけています。une table といった具合です。これを読む際にはわざと une と table の間に少しの間をおきます。これにより une を聞いた競技者が、場のカルタの中で女性名詞の赤い取り札に集中します。ここで狙いをしっかりと定めることで札を取りやすくなります。カルタを始めて半年が経ち、その効果を実感することが度々あります。前置詞 à と定冠詞の縮約を扱った際、場所を表す男性名詞をご存じですかと聞いたところ、ある生徒がすぐに jardin (庭) と答えてくれました。フランス語学習

者である私たちが同じ問を投げかけられた場合、とっさに答えを出すのは思いのほか難しいのではないのでしょうか。実は、jardin はカルタでおなじみの単語なのです。こんなことは第3者から見ればなにげない授業的一幕かもしれませんが。しかしその時私は授業で教えたことが知識として生徒の頭のなかにしっかり定着しているのだということを実感し、うれしさがこみ上げてくるのを感じました。以上、高校の一教室からお伝えしました。

(英語学修士2年 黒井駿)

## 留学報告

2020年に始まったコロナウイルス感染症によりしばらくの間海外への渡航が難しくなりましたが、パンデミックの勢いが収まりつつあることを受けて東北大学では2022年秋学期から交換留学が本格的に再開しました。そうしたなか、哲学専修4年の小松澤君は2022年秋から1年間フランス・レンヌ第二大学に留学しました。レンヌ第二大学は東北大学との関係が深い大学です。以下、小松澤君の留学報告です。

私は2022年9月から一年間、レンヌ第2大学に留学しました。留学先で生活を送る中で気づいたこと、感じたことを、この場を借りてみなさんにお伝えしたいと思います。まず勉強面についてですが、レンヌ第二大学には、付属の語学学校(CIREFE)があり、交換留学生は、そこに無料で一学期間通うことができます。また、その語学学校の過程を修了すると、それが東北大学での単位として認められます(6ECTS)。時間は、午後6時から8時まで、2時間の授業が週2回あるだけなので、負担は少ないでしょう。ちなみに同大学には日本語学科があり、その登録者の数は全学部・学科の中でも上位にくるほどだそうです。日本語学学科で日本語・日本文化を学んでいる学生はもちろん、必ずしも日本関係の勉強をしているわけではない。他専攻の学生も漫画やアニメ、ゲームなどの日本のポピュラーカルチャーに強い関心を持っており、レンヌ、いやフランスの学生と交流するにあたって漫画やアニメに関する知識はいわば「基礎教養」のような位置づけになるかと思います。



レンヌ第2大学でのデモの様子

現在、東北大学からここレンヌを含むフランスに留学する学生の数は、特にコロナ以降、減少の一途を辿っています。事実、現在私と同じタイミングでレンヌに留学している東北大学の学生は、残念ながら、一人もいません。これは非常にもったいないことだと思います。レンヌは、理想的な留学先です。先に挙げたフランス語学校のことは改めて繰り返すまでもないでしょう。そして、何よりも、人の温かさがレンヌという場所の最大の魅力です。手続きの関係でパリを訪れたり、あるいは授業の合間をぬってイタリアやスペインなどの近隣諸国を旅行したりして、疲れ切ってレンヌに帰ってくると、暖かく、人懐っこいレンヌのひとびとが笑顔で挨拶してくれました。留学先での生活は必ずしも簡単なものではありませんでしたが、そんなとき、レンヌの人々の笑顔に何度助けてもらったことでしょうか。フランスの他の地方に行った際に気付いたのですが、レンヌの人々の温かさは、フランスの中でも類を見ないほどのものです。現地で学びながら東北大学からもっと多くの人がレンヌに留学して、そしてレンヌからもっと多くの人が東北に留学して、海をまたいだ交流の輪が広がっていけば素敵だ、そんなことを感じた次第です。現在は新型コロナウイルス感染症に加え、過去稀に見る円安や某国での戦争等、留学をためらう要素が多いかと思います。しかし、それでもなお、私は後輩のみなさんに海外へ留学することを強くすすめます。東北大学は留学に非常に力を入れているので、色々な制度をぜひ有効に活用してみてください。それでは、最後まで読んでいただきありがとうございます。

(哲学専修4年 小松澤亮晴)

小松澤君より半年遅れて編集者である佐藤も半年間の交換留学に飛び立ちました。行先はフランス、ではなくアメリカです。以下、私のアメリカ留学報告になります。



小松澤君をはじめとする同級生や後輩たちがフランス留学へ旅立ってから半年後、私はアメリカ東海岸にあるペンシルバニア州立大学（略称ペン・ステート）へ向けて羽田空港を飛び立ちました。ここではアメリカでの「フランス語体験」について紹介したいと思います。

アメリカに交換留学する、といえはすなわち英語を学びに行きことだ、と考えるひが多いかと思ひます。しかし、アメリカの大学の制度や特質を生かすことで、あたかもフランス語圏にいるかのような豊かなフランス語学習環境に身を置くことが出来るのです。私は留学先の大学で、第二外国語としてフランス語を学ぶ授業を受講しました。この授業では作文、会話など実践的にフランス語を使う練習をしました。授業はおもにフランス語で行われました。この授業の指導教員はテイラー・オコーナー先生という博士課程に在籍している大学院生で、18世紀の啓蒙思想を「ビーガニズム」という観点から研究しているとのことでした。オコーナー先生と何度かフランス語で会話をする機会がありました。話を聞くなかで、私の留学先であるペン・ステートを含む私立・公立トップ校ではフランス語やフランス文学の研究・教育環境が充実しているということが分かりました。これらの大学の仏文科の大部分は「ロマンス言語学科」の一部をなしていますが、ペン・ステートは例外で、ここには独立した French and Francophone studies という学科があり、オコーナー先生もここに所属しています。アメリカの大学の仏文の様子は、日本のそれとは大きくことなっています。現在、アメリカでフランス語やフランス文学の研究に携わる人の多くが、伝統的なフランス文学研究の枠組みを超えてアフリカ研究、ジェンダー研究などの学際的な研究活動を行っています。仏文に限らず、アメリカでは人種、ジェンダーといった個人のアイデンティティーに関わる問題に関する研究が盛んだということですが、これはアメリカの社会的状況を反映してのことです。オコーナー先生を介してアフリカ出身の院生の方と話す機会もあり、フランス文学研究の「今」を知ることが出来ました。そのほか、ペン・ステートにはフランスからの留学生も多く在籍しており、また南米出身者の学生でフランス語を話すことのできる人たちにも出会いました。彼らとの交流を通してフランス語を使ったコミュニケーションの力に磨きをかけることが出来たことは、貴重な体験でした。



ペン・ステートの玄関口、オールド・メイン

(英文学専修4年 佐藤勇人)

## 編集後記

今年度号は編者の事情（留学等）により編集が遅れましたこと、お詫び申し上げます。本号はフランス文学専修以外にもフランス語を熱心に勉強している学生がいることを紹介してはどうかとの阿部先生の提案を受けて以上のような構成になりました。いかがでしたでしょうか？お忙しいなか記事を寄せていただいたみなさん、アメリカ留学中に取材に応じてくれたテイラー・オコーナー先生、そしてなによりも遅々として編集が進まないなか編者を叱咤激励して下さった阿部先生に感謝します。

### フランス文学研究室ホームページ

<http://www.sal.tohoku.ac.jp/French/index.html>

講演会やシンポジウム、学生の活躍など多くの情報を随時更新中です。是非覗いてみてください。

「フランス文学研究室 NEWS」に関するご意見・ご要望は、以下の宛先までお願い致します。

TEL/FAX : 022-795-5973 (研究室)

Email : rom14imp@gmail.com (編集者アドレス)